

せせがむし

発行・古平町史編纂委員会
編集・古平町史編纂室
第十号(毎月一日発行)
平成二年七月一日

古平の地名

近藤 芳二

十八、六畜内 ろくしない

「六志内」 昭和六十三年
度の古平町全図
「ルウクシナイ」 明治二十
五年度二十万分之一
「ルウクシナイ」 武四郎え
ぞ地紀行
「ルオクシユナイ」 永田
地名解
「ル・クシ・ナイ」 山田
(北海道の地名)
●永田地名解では、
ル・オクシユナイ 路ヲ流
ル川 「オ」ハ乗ル義
●山田(北海道の地名)
ル・クシ・ナイ 道が・

通っている・川

二人の説は似たようなところもあるが、相反するところもある。共通している点は、おそらくアイヌの時代に川筋を通過して、神恵内に抜ける道があったのではないかと想像される。その川は、観音滝の上流から、当丸沼に出てトーマル川を下るのが近道のようなのである。

十九、当丸 トウマル

昭和六十三年の古平町の地図では、
「トーマル川」(神恵内側)
「トーマル山」(古平・神恵内
の境界)
「トーマル峠」(古平・神恵
内の境界)
「トーマル沼」(神恵内側)
いずれも古平・神恵内国道沿
線にある地名で、車窓から簡単

に眺めることができる。ただ当丸川(当丸沼につながっている川)については、ちょっと見えない。
トーマル沼、当然沼について地名であると考えていた。何年か前に峠ではじめて当丸沼を発見して感激したことがある。
●永田地名解では、
トーマル(沼より下る川)
●山田(北海道の地名)では、
ト・オマル(沼に入る道)

どちらの説が正しいのかももう少し調べてみたい。
第二号から八回にわたって連載した『古平の地名』は、今回でひとまず終わりました。
日ごろの研究の成果を発表していただいた、古平小学校の近藤先生にお礼を申しあげるとともに、また、今後にご期待をいたします。
ありがとうございます。



ニホ・ボ

△7月の山山来車

- 古平、積丹両郡の四か町村が古平・余市間の道路建設を道に陳情する (昭和十年)
- 札幌北光小学校児童六十余名が海水浴に来町し、〇番屋に宿泊する (十一年)
- 浜町郵便局新庁舎が落成し移転する (十二年)
- 札幌土木現業所長一行が、余市からの海路と陸路について視察する (同年)
- 鉄道省建設局より鉄道建設視察のため来町する (同年)
- 古平青年学校が開校し、小学校に併置される (十五年)
- 米穀通帳が配付され米が配給制になる (同年)
- 「夏時間制」で学校の始業時間七時になる (十八年)
- 鉱石積取船射水丸が米軍機の攻撃を受けて沈没(二十年)
- 古平・小樽間の定期船として正運丸(百五十トン)が就航する (二十一年)

故郷を想う

福井幸三

いつだったか——函館のスキーの大先生、北海道スキー連盟副会長佐藤先生から手紙が舞い込んで来た。

その中に入っていた、『大正十年頃から古平では弁天山でスキー大会があった』という、そ

の当時の新聞のコピーを見て驚いた。

ジャンプの部優勝・野村、外誰々、大回転優勝、これも野村さん。あと仲谷の父ちゃん（仲谷さんの二代目、昇二さん）その他と記されていた。

この時代に、すでにこのような先達者が居たとはい——。他界された、初代の古平体育連盟会長の越中庄七さんから、「古平で一番早くスキーをしたのは（大正七、八年頃）私なんだ」

と、聞いたことがあったが、改めてその頃の練景気とか歴史の一端が偲ばれる。

ここで私の記憶の中にある、限られた大先輩だがその人たちの思い出を述べてみたい。

▽泉商店の兄さん——スパツとした服装で、弁天山のスロップで幾度か憧れの技術、テレマーク回転を見て感動した。

▽美国の河崎局長さん——万能スポーツマンで、スキーも上

十口平スキーの廿日話 —— その二 ——

手だった。洗練された技術をもっていた。なぜかチョイチョイ古平で滑っていた。

▽山川先生——村上回漕店のお嬢さんと結婚され、古平小学校で永く先生をされていた。日和山のとっぺんからノンストツプで、大三（だいさん）の丘まで滑降した雄姿は忘れられない。

▽梅野潮太郎さん——古平では第一人者、特にクリスチャニアターの名人で、何かとリ

ーダーになって、私も何回かツアーにも連れて行っていた。た。ジャンプも上手であった。

▽斎藤さんの兄さん——スキーに野球に、さらりとした方で、近所であったのでよく可愛がっていた。惜しくも戦死された。

▽直服部直ちゃん——元気なスキー姿だけが思い出される。野球もやっと思いが、スラリとしたハンサムボーイで、さわやかな青年であった。

▽直服部食料品店の亡くなったおじいちゃんも、相当なお歳になるまで山スキーを楽しんでおられた。

▽沢江の前田直さん——自分の作ったスキーをはいて自慢していた。気性の激しい馬力の滑りで、特に距離が強かった記憶がある。きつと裏山のデコボコ

三段の沢江スロップで、大回転などして楽しんでいたのでしょ。きりつとした男前だった。

▽渡辺直ちゃん——上手だった。柔らかな身のこなしで、いつも高価なバリツとしたスキ

ーズボンをはいてかっこよかった。白川のラーメン初めてご馳走してくれた。あのラーメン、あの胡椒のきいたラーメン、ほんとにうまかった。忘れられない。支那ちくの味も初めてだった。野球も肩の強い投手でカーブが得意だった。

▽兄・福井敏雄——研究熱心だった。用具の手入れも良くしていた。転ぶのを見たことが無かったから慎重派だったのだろう。別に教えてはくれなかったが、よくツアーには連れて行ってくれた。生きていたらなァと想うが——。

思い出すままに挙げてみましたが、スキーの楽しさを無言のうちで教えてくださったようです。私たちも、これから後輩に何を残していったらいいのか。スキーという小さな世界ではあるが、ひとつの（北方文化として）皆楽しく滑りましょう。

人間は足があるから歩く、走る、飛ぶ。そこに山があるから登る。海があるから泳ぐ。人生楽しからずや。（以下次号）

《騎馬戦》《せんべい割り》に熱狂

本 間 銀 朔

その時踊った遊戯はへ一寸法師で、遊戯は嫌いであったし決してうまくはなかった。

高等科一年生になるとへせんべい割り、競技がある。額に鉢巻きで押さえた南部せんべいを

つけ、それを竹刀代わりに稲わらを直径五センチ、太さ六十七センチぐらいの長さにして束ね、白は白の晒で、赤は赤の布でく

るむ。これは各自が家の人を作ってもらふ。母に頼んで、出来るのを待つて夜はそれを枕元に置いて寝た。

運動会の花形は、《騎馬戦》と《せんべい割り》のようであ

った。高等科二年生になると大きいので、とても上級生には向かっていけない。せんべい割りが始まると逃げ廻ってばかりいたが、それでも早々に割られてしまい、グラウンドに座って競技

の終わるのを待つた。

当時、遊戯の音楽はクランドの中央に大太鼓を置き、オルガンやバイオリンを演奏した。拡声器が無くても結構楽しい運動会だった。

また運動会の様子を、札幌の北村商会というところが映画に撮影し、新地町にあった古盛座へ巡回して来てはそれを上映し

ておみくじをした。待ちに待った鯨漁期に入った。あちこちでへはしり鯨がとれたという話が伝

わるともうそわそわして、再び神社詣でをしてへおみくじ、下ろしをする。

まず、漁期間の日付を紙

片に書いて台の上に置き、* 神官が祝詞を奏上した後、* 御幣をとってその紙片の上

た。当時としては大変珍しいことであつたと思う。勿論、無声映画であつた。

上映されることが知れると古盛座は満員になつたようであつた。一年生だつた私が旗取り競争で、三等の旗を持って賞品席に行くのが写つていた。

その後は、このような記録映画を撮影することは無かつたように思う。あのフィルムは今

何処にあるのやら……、思い起こせば、これはもう六十六年前のことである。

—— 終わり ——

起 縁 場 鯨

を「払え給え」とあそばすと風が起こり、紙片が御幣に付いたり飛び上がったたりする。その紙片に書かれた日が大漁というのである。このおみくじを信ずる漁場に行くとき、二、三の神社からのおみくじが神棚にはつてある。「これだばア、毎日大漁だてエ——」といつて微笑している。

■古平小学校保護者を解散して、古平小学校父母と先生の会を結成する (二二年)

■小樽藤山海運社により、北海丸が古平・小樽間の定期船として隔日運航する (二三年)

■正隆寺が全焼する (二六年)

■「古平町弘報」第一号が発行される (同年)

■「NHKのど自慢」が古平小学校で開かれる (同年)

■小樽・北後志市町村間の消防相互応援協定がなる (同年)

■石狩湾底曳き禁止区域の拡大を求める沿岸漁民総決起大会が開かれる (二七年)

■古平町開基八十五周年記念祝典を行う (二九年)

■水見句丈が高野素十句碑を会館敷地に建立する (同年)

■寿原代議士が消防自動車寄贈「寿原号」と命名 (三四年)

■豪雨による増水で廻り淵橋が流失する (三五年)

■集中豪雨による罹災者を古平小学校に収容する (同年)

■稲倉石が全道環境衛生最優秀地区として表彰 (三六年)

やっもの《すけそ》も
かい

当時の朝鮮では高級魚

古平の《すけそ漁》の始まりについては、町史第二巻に載っているが二ページに満たない。

当時の資料が無いのである。なにせ鯨漁全盛時代で、すけそ等に目をくれる者も無く、時折網にでもかかろうものなら邪魔物扱いにされ、たまに家庭に持ち帰っておかずになるぐらいであった。

昭和の初め頃は、川崎船にそれこそ八丁櫓をつけて出漁していたが、沖に出るには危険が多過ぎた。昭和四、五年頃になって、大谷某が川崎船に八馬力程の焼玉エンジンを載せ、望月某がその機関士をして本陣の浜から出漁していたという。

（大和田幸太郎さん談）
一方、日本海岸でも新潟地方では、早くからすけそ漁をしていたようである。明治二十二年

頃には、すでに乾物に加工をしていたことが記録にある。

「新潟地方沿岸でとれるスケトウ鱈は、朝鮮国咸鏡道（現在の北朝鮮咸鏡道）沿岸でとれる『北魚』と同じで、同国ではその乾製品を『明太』といい、日本での鯛以上に珍重する。ことにその眼肉は、精気を養うのに奇効があるというので特に珍重されて、時にはこれを運搬する人夫がこっそり抜き取る程だという。」

この『明太』の需要が多いことを聞いた農商務省の水産局関係者が新潟県に伝え、この『明太』の輸出を奨励した。

製法はスケトウ鱈の腹を開いて、二十尾程の頭を竹で通した

海面に油を流したら

波がしずまった!!

ドイツのハンブルグからニュールークへ航行中の漁船が暴風雨にあった。そこで話に聞いていた「油を流せば、波がしずま

ものを一連として、寒風にさらしてよく乾かす。眼とえらの部分はそのまましておく。」とある。これは明治二十二年の新聞の記事を要約したものであるが、すけそ漁はこの『メンタイ』の輸出によって盛んになってきたのである。

参考までに、大正になってからの本道のすけそ生産高は次のようである。

延 四年 一一、五八〇ト
十五年 二六、三〇〇ト

十五年 三六、七八四ト
十五年 七九、二五六ト

これを見ると、本道のすけそ漁は大正末期から急激に増えているが、これは鯨漁の不振による漁業の転換を意味している。

「ということを思い出し、積んでいた魚油を海面に流したところ、なんと！波は船に近づかなかつた。その時に使った油は百匹足らずで、一時間に五匹ほどの割りであったという。」

これ、ホントの話——？
（艦二十年・水産雑誌より）

陸上自衛隊が町民の無料診療にあたる（三七年）

島根県より購入の肉牛を飼育農家に配付する（三九年）

琵琶湖産のアユ稚魚を初めて古平川に放流する（四一年）

野村甚作がアユの養殖に成功する（四二年）

古平ママさんバレークラブヲ結成する（四九年）

古平小学校開校百周年記念に吉田一穂の筆になる「ふるさと」の礎」の碑を同校敷地に建立する（五十年）

「あ」と「がき」

早いもので《せたかむい》も昨年十一月に発刊してから、数えて第十号になりました。その間、絶えず助言やご援助、ご協力をいただきました。これからも多くの人に親しんでもらい、そのことが郷土への関心を深めることにつながっていくことを願っています。いづれ、あなたの貴重な体験もお聞かせください。